

令和5年3月23日 高校と地域の連携強化戦略会議 議事録

政策企画課

日時：令和5年3月23日 10時から12時

場所：安芸高田市役所第2庁舎2階 応接室

出席者：上水流委員長、佐田尾委員、牛来委員（オンライン）、本多委員、福岡委員、久保委員、
中間委員、永井委員

事務局：高下課長・戸田係長・旭

作成者：旭

事務局

これから安芸高田市高校と地域の連携強化戦略会議を始めさせていただきます。

では、はじめに上水流委員長にご挨拶をお願いいたします。

上水流委員長

皆さんおはようございます。足元の悪い中、お集りいただき、ありがとうございます。

来年度、入ってくる高校生の数が出てきて、この会議としてはあまり好ましくない数字の傾向なのかなということで、やはり、近々なる対応が必要であることは、変わらない状況だと思っています。

そういう意味で、二つの高校が、元気がでるような形で、話し合いができればいいと思いますし、加率的に、いろんなことを考えていかなきゃいけない状況だと思っています。活発なご議論をよろしくをお願いいたします。

事務局

ありがとうございます。

今日の会議は、これから約2時間、12時までを予定しています。

資料の確認をさせていただきます。会議次第、資料1：戦略会議の取り組みについて、資料2：中学生進路アンケート、前回の会議の議事録になりますが、大丈夫でしょうか。

では、ここからが議事に入っていきますので、上水流委員長に進行をお願いします。

上水流委員長

それでは、お手元の次第に従い、進めて参りたいと思います。

最初に、資料1の高校と地域の連携強化戦略会議の取り組みについてと、資料2の中学生進路アンケートについて事務局より説明をお願いいたします。

事務局

まず資料1の高校と地域の連携強化戦略会議の取り組みについてから説明をさせていただきます。

資料の説明に合わせて、前回の会議から今日に至るまでの、予算関係や協議内容も合わせてご説明させていただきます。

① 協議の経過

今年度6月に開催した第1回の会議から、本日までの議題を表の方でまとめている。

(別紙：資料1)

② 第4回 高校と地域の連携強化戦略会議で出た意見について

12月に会議を開催して、委員の皆様にご協議をいただいた内容の主なものを、①から⑧まで、テーマごとに整理させてもらっている。

そうした中で、来年度、どのようにつなげていくか、新年度予算（令和5年度）の中でも、我々からこの戦略会議の協議内容を経て協議させてもらってきた。

③ コーディネーターする人材

高校と地域とをつなぐ取り組みを、人材を確保して取り組みを進めていけないだろうか、と、予算編成の中で話をさせてもらった。しかし結論から言うと、令和5年度の予算ではつけることができなかった。もう少し「コーディネーターする人材」の役割や、学校での仕事内容、また地域とどういう関わりを持っていくかをしっかりと継続して協議をした上で、翌年度以降の取り組みに向けていけたらと思っている。

⑥ 高校応援プロジェクト補助金

令和5年度の予算では、今年度と同様に、高校応援プロジェクト補助金を予算化できた。各校上限100万円を予算計上している。

・議会について

2月の議会で、ある議員からの一般質問で、石丸市長に「この高校応援プロジェクトは、どのような成果を求めているか」という質問があった。それについて、石丸市長は、「ねらいは二つある。短期的なものとして、吉田高校・向原高校、両高校の入学が増えること、そして、長期的には、両高校で学んだ生徒たちが、この安芸高田市に貢献してくれる、そんな人材を育ててもらいたい」と答弁した。高校生が安芸高田市の高校に通ってよかったと思えるような取り組みに向けて、意見交換を密に進めていきたいと回答している。

・高校応援プロジェクト補助金意見交換

2月16日に、久保校長、中間校長と、石丸市長が、高校応援プロジェクト補助金、また高校の取り組みのことで意見交換をされた。

両高校の校長先生からは、この補助金の今年度の活用の状況と、来年度の活用の見込みをお話いただいた。話の中で市丸市長から、要望として出た意見を、紹介させてもらう。

今の形での補助金は今年度からだが、以前も安芸高田市から、高校応援の補助金として出していたものがあり、それが一度なくなった。これがまた今年度復活したわけだが、ぜひとも、有効に活用していただきたい。自由度の高いものではあるが、願わくば、投資的なものに対して、結果がわかるような形で活用していただきたい。

もう1点は、生徒が発案した取り組みの具体化に活用してもらいたい。生徒たちにとって、今までなかったものにトライすることや、100万円をもって飛び込んでみるようなものを検討してもらいたいと話された。

● 中学生進路アンケートについて

目的：安芸高田市内の中学3年生を対象に、卒業後の進路選択の状況と、高校進学をする際に、その高校を選んだ理由などを参考にするため。

全体の回答数：合計185人

・問2：卒業後の進路予定

全体の約4割の方が吉田高校への進学を希望。続いて市外の公立高校への進学が32%、市外の高校への進学が19%。

・問3：進学先を選択した理由

・吉田高校を選択した理由

学びたい・興味関心のある内容の学習ができるから…26.8%

自宅から近く・通いやすいから…25.4%

・向原高校を選択した理由

自宅から近く・通いやすい、自分の実力に合っていた

・安芸高田市外の公立高校を選択した理由

学びたい・興味関心のある内容の学習ができるから…21.1%

卒業後に大学に進学するための学習ができるから…17.4%

・安芸高田市外の私立高校を選んだ理由

入りたい部活動があったから…約3割近く

卒業後に大学に進学するための学習ができるから…21.9%

・安芸高田市外の高専を選んだ理由

学びたい・興味関心のある内容の学習ができる・自分の実力に合っていた

・定時・通信制の学校を選んだ理由

自分の実力に合っていた・学校のもつ雰囲気やイメージがあっていた

問4：高校に対して期待すること

・吉田高校に対して期待すること

学力を身につけること…25.7%

興味・関心のある分野の学習を深めることができる…18.1%

・向原高校に期待すること

学力を身につけることができる、興味・関心のある分野の学習ができる、友人や先輩・先生などたくさんの人と出会うことができる、地域のことを知ることができる

・安芸高田市外の公立高校に期待すること

学力を身につけることができる…26.3%

部活動に活発に取り組むことができる…19.3%

・安芸高田市外の私立高校に期待すること

部活動に活発に取り組むことができる…32.8%

・安芸高田市外の高専に期待すること

資格や学力を身につけることができる…44.4%

・安芸高田市外の定時・通信制の高校に期待すること
友人や先輩・先生などたくさんの人と会うことができる…約3割
問5では、入りたいと考えている部活動について挙げてもらっている。

上水流委員長

今、二つの資料についての説明があったが、順番としては、まずアンケート結果についてお話を
して、そのあと、短期的な取り組み、長期的な取り組み、最後に、安芸高田市からの応援補助金の
活用について議論していきたいと思っています。

① アンケート結果について

上水流委員長

最初に、このアンケート結果について、協議していきたいと思いますが、今のご説明を聞かれ
て、皆様からご意見をちょうだいできればと思います。

福岡委員

このアンケートを見た時に、高校に期待していることの中に、地域のことを知ることができると
回答する人たちがおられるんだなあというのが、私がちょっと感じたところです。

「その地域のことが知りたくて、地元の高校に通う」という選択に繋がったところを、もう少し
私は聞いてみたいなと思いました。

地域のことと言っても、中学校3年生が思う地域のこととは、どんなところに学ぶ可能性を感じ
ているのか聞いてみたくなりましたし、そういう動機があったのだとしたら、そこをかなえてあげ
られるような地域の役割を考えてみたいと思いました。

上水流委員長

このアンケートを見た時に、やっぱり当たり前のことなんですけど、高校って勉強する場所なん
だなって思いました。

「自分の学びたいことが学べるか」ということの数値が高くて、そこをどう満たしていくかが一
番重要なんじゃないかと、これを見て思いました。

中学生も自分の今後のことを考えてやっている。そうすると、何を学ぶことができるのかをしっ
かりアピールしたり、特色として出していったりがないと、その高校生にはなってくれないんじ
ゃないのかなと正直思いました。

もちろん部活も大きな理由としてありますが、部活は一定程度人数がいなくていけないので、人
数がない中で部活は増やせられないので、まずはやはり学習のところで、中学生の希望をかなえ
てあげて、人数を増やして、それから部活動ができるっていう体制なのかなと思いました。

ストレートに言わせていただくと、向原高校を選んだ理由は「自分の実力」と「自宅から近い」
という2人のご回答。高校に行く時に「自分が学びたいものがある」という回答が必要なんじゃな
いかと思いました。

向原高校の「学びの特色」という部分を出していく必要があると、このアンケートを見ながら感
じました。

中間委員

アンケート結果を事前にいただき、見させていただいて、私もまさに同じことを思いました。や
はり「学び」のところですよ。そこを充実させていくのは、本当に高校として求められることだ
というのを、当然ながら思いました。

逆に言えば、そこを、学校として大事に考えて、しっかりやっていかないと、「普通科高校だか

らこういうカリキュラム」というような、我々が持っている狭い経験の中での固定概念みたいなものをちょっとずつ変えていかないと、中学生のニーズに合っていないのかなと感じました。

先ほど「学び」という部分をどのようにアピールしていくか、特色を作ってどのようにアピールしていくかが必要という話でした。まさにその通りだと思っています。教育課程の編成もそうですが、現在、補助金を使わせていただき取り組んでいる、生徒の生きる力の育成の取り組みも含め、教育課程内・外の学びを、もっとアピールすべきだったと反省しています。引き続き、アピールしていきたいと思っています。

久保委員

まず、このアンケートの対象は、今の中3ですよね。この1枚目の卒業後の進路についてお伺いしますっていうのは、まさしくこの数字の通りの実態になっています。吉田高校への進学者が、今年度は、多くなくて、1次募集で80名ちょうどでした。定員枠は、探求科が80名。120名の募集に対して80名なので、1クラス40人丸々空席ができてしまう状況でした。

このことは、3年前の探求科ができて2年目の年もそうでした。今回、安芸高田市の中3の人数が25、6名少ない状況だったので、ある程度減少を予想していましたが、1クラス分の穴があくとは、思っていませんでした。広報を一生懸命やってきたつもりですし、そこに事業費を使わせてもらったにもかかわらず、結果が伴わなかったことは残念でならないと思っています。

2次募集で3名いただいたので、一応3クラス目の数をいただいたところですが、もう少し、安芸高田市の子が選んでくれる、吉田高校に半分は来てくれる、半分来てくれる年もあるので、半分は恒常的に来てもらえるよう確保していきたいことは、吉田高校の短期であり、長期的な展望だと思っています。

選んだ理由で「学びたい学習があるから」というところは探求科の特色も、やや出てきているのかなと感じています。

2番目に「自分の実力に合っていたから」という数字も、割と多くなっていると思います。ここ数年の経年比較で、学力に関しては、かなり団子になってきているというか、上位層が少なくなっています。これはもう少し具体を追わないといけないのですが、広島市内の私立高校が、特別進学クラスをどこも作っていて、そこに入る生徒には「授業料を安くします」とか「キャッシュバックします」とか、高校に行っている間に塾に行けば「塾のお金も出します」など、かなり手厚いことをやっています。「タダになる、安くなるならそこへ行こうかな」というような動きもあるかなと思います。

国公立に行く学力があるのに、工業系の大きな大学は結構、学力の高い子を、無償で通える仕組みがあります。うちの生徒も、そこへ毎年数名入っていきます。「もうちょっと粘ってみては」と伝えますが、年間100万という出費が抑えられますので、そういったところを選んだり、授業料が半分になるということで選んだりする生徒は実際います。

ということは、おそらく中学校から高校に上がるときも、そういう動きがあるんだろうと推察しているところでは。そこはもう、私立のやり方については、我々は何とも言えないし、勝てないところもあるんですけど、とにかく選ばれるような学習内容であり、成果が出ているというところをしっかりと訴えないといけないと思っています。

例えば、選んだ理由のCのところ「卒業後に大学に進学するための学習ができるから」という点も、もう少し延ばせたらと思っています。吉田高校は、多分、始まって以来じゃないかと思うんですけども、3年連続で国公立に入学する生徒数が2桁になりました。90名しか卒業生がいない中、今回10名が国公立の大学に行っている。ここは、この地域にあって、誇れる数字だと僕は思っています。だから、吉田高校へ来ても、しっかり進学の見込み、サポートができるよと訴求をしっかりといただいて、市民の方への理解を深めてもらえたらと思います。

教育長に伺ったのかな、安芸高田市には進学できる公立高校がないっていうような、言葉もあるように聞きましたので、そこはもう少し、訴えていきたいと思っています。

いずれにしても、1.2年では、なかなか効果が出ないところもあるので、今、職員に対しては、

とにかく継続して5年、10年、同じことでもいいから、この数字を落とさないことに取り組みましょう。それから訴えていくことをやっていきましょうと伝えています。

このアンケートを行っていただいて、これは今後の戦略の参考になるなど、ありがたい結果です。

上水流委員長

大学進学が大きくて、そこをどうサポートできるかってことも必要かなと思います。他にいかがでしょうか。

永井委員

高校へ送り出す側として、今回もなかなか、地元の高校へ進学者を増やせなかったことで、課題あるいは責任を感じています。

日常的に、校長会では、何とかして、地元の高校への進学を増やそうと、いろいろ議論をしていますが、その中で出てくる課題として一番大きいのは、保護者・生徒が、力をつけてもらえないというところを、なかなか打ち破れないでいます。

地元の高校へ進学しても、次のステップへ繋がるような力をつけてもらえないということが、かなり保護者・生徒の中に、定着してきているようです。中には、高校生、あるいは地元の高校へ進学させた保護者の方が「もう来なさんな」、「来ても、力がつかんよ」というふうなことを後輩に伝えていくとか、そういうところで、中学校は悩んでいるというのもあります。

それから、特に部活動をやっている生徒に対する、私学の早い段階での勧誘によって、かなりの生徒が、私学へ流れてしまうという動きが、このところ、県内県外問わず、活発になってきています。しかもかなりの優遇で、学費免除とか。中には、小遣いという表現があっているか分かりませんが、お金まで出して支援をするというような私学もあります。この辺りは本当に、なかなか打つ手がないところです。

それからもう一つは、私が個人的に思っているのは、中学校の教員の地元率が下がってきていることです。今回、吉田中学校、向原中学校、二つの中学校は、管理職が安芸高田市内に住居を構えていません。それが良い悪いの議論ではなく、教諭層にしても、地元率が下がっていますので、地元の高校への愛着といった面は、ある程度減少しているのではないかなと、感じています。

そういうことの中で、来年度に向け、中学校へは、高校との日常的な連携、生徒が意識されがちですが、教職員同士の日常的な連携として、例えば授業を見合うとか、何かしらの形で、意見交換をしてみるとか。年に1回、2回の打ち上げ花火的な連携ではなくて、何か日常的な連携を高校としっかり議論して、持っていく必要があると思っています。

もう一つ、これは高校へのお願いになりますが、高校の次のステップへ繋がる力を、確実につけていただくということをお願いしながら、保護者、生徒の意識を変えていく必要があるということも感じています。

佐田尾委員

部活で私学からの勧誘というのは、一本釣りに近いものですかね。

永井委員

そうですね。早い段階で、中学校長の方に、うちへ来させてくれんかとか、地域の部活動の指導者と高校の指導者が繋がっておられるというのが、最近特に、顕著な特徴だと思います。学校が知る前に、中学生の地域のクラブでお世話になっている指導者と、高校の指導者が繋がっておられて、うちへ…みたいな話があって、もう成立したような段階で中学校へ来られるという状況ですね。

牛来委員

まず、アンケートで、生徒の皆さんが「学力」「学び」とは、その通りだと思いますが、一方で、その地域の方から「あそこへ行っても力がつかない」ということを言われていると、今、聞きました。学力をつけるコースすべてを網羅してっていうことは、今の段階から他の高校に比較して秀でる、特化できることは難しいと思ったとき、特色を出した学びの中でも、何かに特化するとか、特色を出すことが必要なのだと思います。これまで議論の中にあつた、例えば、英語、SDGs、ビジネスなどの、何かに特化する。

ただ、その特化するという時に、近隣の市町から集めるっていう発想での特化レベルでは、あまり変わらないと思います。市長がおっしゃった「入学者が増える」という一つの目標のところ、全国から行きたいと、ここへ来たい、安芸高田市の高校に行きたいと思っていただけるような、思い切った戦略が必要だと思っています。徹底的にやるというか、面白いことをやるっていうか、エッジのきいたことをやるのが、集客、生徒の獲得に繋がるのかなと思います。

一方で、とは言いながらも地元の人に支持されなければ続かないので、何かに特化する、思い切ったことをするにしても、必ず地域の人を巻き込みながら、行っていくことが必要だろうと思いがら聞いていました。

上水流委員長

学びの特色を出していくことは、一つの課題かなと思いますし、進学もありますので、地元の人からすると、地元の学校に行き、目指す大学に行けることも、重要な要素だと思うので、そこは考えていかないといけないところです。

それでは、アンケートにつきましては、以上にしたいと思います。

続いて、来年の取り組みについて、このアンケートを踏まえ、短期的な取り組みについて、話をしていければと思います。

今年度の議論を踏まえながら、より実施していきたい・安芸高田市にお願いしていきたいことは何なのかを、検討できればと思います。

短期的な取り組みは、来年度の募集に効果が出ないといけないと私は思っています。3年後、5年後ではないだろうとあって今回出たアイディアの中では、補助金の話があって、例えばパソコン購入に5万円を支援することも、短期的な方法だろうと思っています。それが本当に良いことかどうかは、皆さんの中でお考えはあると思いますけど、短期的に何かいうことでは、取り組みの1つとしてあるだろうと思います。

2つ目は、学力をどうサポートしていくかで言うと、何らかの形で学習の支援をしていけるような、塾を作るのは私自身ちょっと難しいんじゃないかと思っています。何かしら個々の生徒が学びたいことを支援できるような制度があってもよいのかなと思っています。

短期的なこと、ご意見がいただけたらと思います。

先ほど永井委員から出た、中学校と高校の先生たちの継続的な結びつきを作ることも、すぐにできる施策の一つなのかなと思っています。そういう場を作ることが大事だと思っています。

久保委員

永井委員からの話の中に、教員の地元率の低下があって、私も中学校へ訪問をさせていただいたときに聞きました。

吉田高校へ入ったことがない先生方が増えているのが圧倒的多数とのことでした。衝撃を受けています。日常的な会話をどのようにというアイディアはすぐには浮かばないところですが、中学校の先生方を招いたオープンスクールとか、見ていただく機会を、まず作らないといけないと年度途中から思っていました。生徒と同時に来ていただく機会を設けられたらと思います。

ただ、これが日常だと出にくいし、土曜日だと勤務の関係もありますので、ここはぜひ、中学校さんにも協力いただいて、向原と吉田を見に行こうという機会を、複数回設けていただけたらと思います。

上水流委員長

安芸高田市の教育委員会が関わって、中学校とともに、いろんな調整をしていただければ、ありがたいと思います。やはり、行ってみて、知っている先生がいると、いないのでは違ってきますし、雰囲気とか、学んでいることが分かれば、生徒に対して自信を持って、ここに行けばこんなことが勉強できると言えると思います。それは大切だと思います。

中間委員

安芸高田市内の学校に行っても力をつけてもらえない、進学が十分できない・保証できない、されていないという意見は、私もよく中学校や地元からも聞いています。これは本当に課題であると思っています。

授業はもちろん、課外のところで補修授業などをやっていますが、もう少し充実させていかないといけないと思っています。そういった取り組みを、今後も継続していくこと。あわせて、向原高校が大事にしていることは、地域を巻き込むことは、引き続き継続してやっていきたいと思っています。

少ない教員の中で、生徒たちに教員だけで力をつけることはなかなか難しい現実があります。ですので、教員としてやるべきことは当然やらないといけないし、やっていく中で、地域の方の力を借りて、取り組みをさらに充実させていきたいと考え、来年度の校内の組織を考えていく上で、チームを作ってやっていくよう進めています。取り組みをより充実させていきたいと考えています。

上水流委員長

より充実させていく時に、課外授業をするにあたっての「人」というところで、何かこんな支援があったらいいなというのがありますか。

中間委員

地域にはいろんな力を持っておられる方が、たくさんいらっしゃるということは聞いています。しかし、実際、どこの誰が、というところまでなかなか情報を入手することができない・知ることができないところがあります。そこを開拓して、校内では地域とのコーディネーター役を設けて、地域へ出かけていけたらと思っています。そういった情報をぜひいただきたいと思っています。

上水流委員長

安芸高田市側で、例えば、自分の経験とか、今やっていることを教えられる人のリストみたいなものを作ってもらえたらと思います。それを高校側が見て、謝金は出さないといけないと思いますが、どなたかを呼んで授業してもらおうといったことが実現していくのではないのでしょうか。

安芸高田市内にもいろんなことされている方がいると思います。ジビエのこととか、移住して面白いことやられている方もいらっしゃいます。様々な経験を積まれている方、アントレプレナーシップをされた方、ニューヨークの銀行で働いた人など、そういう情報をまとめて、リストを作るだけでも大分違ってくるかなと思います。

中間委員

本当にいろいろ情報をいただいて助かっているところです。待っているだけではなくて、学校からも、出ていく。そこが不足していた部分は正直否めないと思います。学校として、もう少し出ていくことをやっていきたいと思っています。

事務局

政策企画課が、高校の魅力化の窓口をやらせていただいています。そういう情報を提供することはこちらでいろいろとできていると思っています。

リストを作るにしても、それまでにいろいろやりとりをさせていただかないといけないと思います。そこは今後また連携してやっていきたいと思います。

上水流委員長

学校側にいると思いつかないとか、知らないこともあるので、高校からのリクエストだけじゃなく、市側からも、人材の情報提供があると、話が広がると思うので、双方に情報交換できる場所があると良いと思いました。

牛来委員

前回、外国体験のイベントをやっている方のお話をしましたが、その方に資料をいただいたので、もし必要であればと思いました。【画面共有】

具体的には、アーチをくぐると、中が小さな外国になっていて、いろんな体験ができる。場所は住宅展示場や大型スーパーなどで行っています。

学校でも多少の謝金をいただきながらやっているようです。海外に行くとしたら、飛行機に乗って入国審査があって、そのあとホテルにチェックインして、買い物をしてということ、子ども向けにやられている。中学校でも実施した実績があるようです。資料は対象を小学生と設定していますが、アレンジでは、高校・大学・大人向けでも、やってられています。

こういう楽しそうなものを、高校でもやって、地域を巻き込みながらやることも、面白いのかなと思います。補助金の中で、もしお願いできそうなチャンスがあれば、声かけされてはどうかと思って、資料を出させていただきました。

上水流委員長

ありがとうございます。

これは前回、向原高校から英語を身につけることへの、情報提供かなと思いますが、他にいかがでしょうか。

短期的なことを考えたとき、どういうことが可能なのか。

もう一つは、これはずっと課題として出ていますが、こうした取り組み自体を知っていただくことは必要だろうと強く思っています。特に中身が伴わないとダメなので、例えば向原高校であれば、特徴をうち出しながら、「変わる向原高校」という情報を今年の4月から7月の間に流して、中学生に伝わるものがないといけないと思っています。

方向性を出すことも、短期的にやらなければならないと思います。

進学について、もうちょっとサポートして欲しいのであれば、我々の声として出してみるのは手だと思います。

安芸高田市の場合は、来年度となると、今の時点で言いづらいところがあると思いますけど、少なくとも、この委員会として出た意見を要望していてもいいのかなと思います。

だから、吉田高校であればこうする、向原高校であればこうするという、思いを出していくことが必要だと思っています。それは長期的な話でもいいと思うし、こういう高校を目指していきますって話でもいいと思います。

事務局

市内の中学校の進学率を高めるなら、市の広報誌を使わなきゃいけない、使うべきだなと思ったので、その枠を取りに行こうと思います。内容はまた相談させていただきたいのですが、タイミングとして、中学生が進路を考えるのに、最適な時期がありますか。

中間委員

7月の夏休み前の3者懇談あたりだと思います。進路の話がスタートするタイミングだと思います。

す。

最終決定は12月末の3者懇談だと思います。

上水流委員長

高校のことをアピールする場所を、市の広報誌に、毎月作ってもらえたらありがたいと思いました。「こんな授業しています」とか、「こんな取り組みをしています」みたいな内容を、保護者に紹介するイメージでしょうか。子どもはおそらく広報誌は見ないので、保護者向けへのアプローチが1点です。

それから、高校の取り組み自体を、ホームページの紹介の他に、子どもたちが見るSNSに発信することを考えてみられたらと思います。今、子どもたちは、大学もそうですが、やはりインスタとか、ツイッターをよく見ている、なかなかホームページを見ていません。子どもたちに届く媒体を使って、アピールすることをやってみるのも一つの手だと思います。

中身をどうするかもありますが、充実させてきたことでもいいと思うので、課外学習とか、いろんなことをやっていることが、届ける機会があるだけでも違うと思います。

久保委員

今の1点目のところは、広報誌にはもう1年以上掲載をしてもらっています。

各月で、向原・吉田・向原・吉田で、ページの欄をいただいて、トピック的に、書いていただいています。それはすごくありがたくて。ただ、読まれる層が中学生ではないかもしれない。けども、カラーですしね。それは本当にありがたいのでぜひ継続していただければと思っています。

事務局

広報誌は継続していくと思います。高校でやっている、ちょっと変わっているところや、何かをやり始めていることなどを、もう少し紹介していければと思います。

福岡委員

先ほど中学生と、高校生、先生も含めて接点があっただろうかという話がありました。

私の高校生活を振り返って、一番印象的だったことは部活でしたが、放課後であったとも思います。学校が終わった後の過ごし方も、学校での学びに含まれていると思ったとき、中学生と一緒に過ごせる放課後の日があっただろうかと思いました。高校に今求められている地域から学ぶような講座が、中学校とも共有されていて一緒に受けられるとか、高校生がやりたい、呼びたいといった人と呼んだ際は、中学生も受けられるしきがあるとか、そういう放課後の使い方があってもいいと思いました。

上水流委員長

中高の結びつき、触れ合い、そういう場があること自体はいいことだと思います。いい先輩がいれば、そこに行きたいということにもつながるので、中高で一緒に何か学ぶとか、高校生が指導側になるとか、何かしらの接触の場を作っていくことは、地道な努力としてはすごく大事なことだと思います。

久保委員

日常的な、先ほどの交流のところでは、部活を中高で何かできればと思います。ただ、移動の面や、けがのことなど、そこはしっかり固めておかないといけないことだと思います。

中間委員

高校も中学校も、人数がそれぞれ少なくなっており、例えば、体育祭は少人数の中でやることに

よって、盛り上がり欠ける、午前中に終わってしまうという状況になっています。例えば中高一緒になって、学校行事と一緒にやる方法はあるかなと思います。

中学校の校長にも相談を持ちかけてみましたが、練習、進行、運営のこと、などで止まっている状況です。行事を盛り上げる意味でも、一緒にやるっていうのはあると思っています。

上水流委員長

中学校と高校と一緒に体育祭をするのはいいことだと思います。いろんな場所でやるのが大切だと思うので、問題は間を取り持ってコーディネートする人がいるかだと思います。

実際やるとなると、中学校も、高校もきついと思うので、そこをうまく取り持ってくれる人がいたらいいと思います。

本多委員

スポーツの関係の個人的な体験談ですけれども、高校時代にはある部活の先生が中学校で同じ部活の人達を引っ張ってきて、一緒に活動を行うことをやられていました。

そのことによって、この高校に来ればこの先輩がいるから、部活が充実しているというところがよくわかりました。

現時点で部活の顧問の先生が、そういったコミュニケーションや活動をされているかはわかりませんが、いろんな部活から門を開いて、いろんな人に来てもらって関わっていく。コロナも落ち着いてきて、人と関わりやすくなってきたので、部活の観点からも、中学生に関わってもらうような形をとってもいいかなと思います。

また、生徒自身が自発的に物事を考えることができ、発言できるような環境を作り上げていくことも、今後、必要になってくると感じます。

もう1点、先ほどの自発的になっていうところで、今後の進学では、自己アピールとか、面接要件がある中で、高校生の生徒たちが、実際何がしたいのか、何が知りたいのかっていうところを精査した上で投げかけて、安芸高田市とどんな関わりをしたいのかを生徒から発案する機会を設けることも必要ではないかなと思いました。

上水流委員長

高校と中学校の繋がりが薄いのであれば、そこを厚くする。部活も含めてですが、方策を考えて、中学校・高校の努力の中で、そこに安芸高田市の教育委員会が入る形で、何かをつなぐことは必要なことだと思います。

佐田尾委員

市内の中高の部活で、アウトドアに関わるものは今のところないですね。

今アウトドアブームで、ソロキャンプブームというのもあります。

去年、私は、三次で江の川漁撈文化研究会の節目の集まりに行きました。昔から、江の川漁撈文化研究会関係の資料は集めてきていますが、市内で言えば、例えば川根には、地域に根差した文化がありますが、それが、どんどん忘れられている文化だと思います。アユ漁とかそういうものを、今楽しめるアウトドア活動として復活させて、吉田・向原の両校の取り組みとして取り組んで、サミットのようなものを誘致するとか。

以前、森の聞き書き甲子園というのを、お話したことがありますけど、そういうものと絡めるとか。よそから若者や、同じ指向性の高校生が集まれるようなイベントができないかと思っています。

上水流委員長

アユ漁とかも含まれたリストがあって、地域文化を教えてくれるような人がいて、高校生が学んでみたい内容に選択肢があるところがスタート地点としてあればいいと思いました。

将来的に安芸高田市に貢献しようとする人材の育成も、話をしていきたいと思います。

地元のことを知っていく、学んでいくことは、たくさんされているお話ですが、先ほど福岡委員から出ました、地域のことを知りたいっていう意見もあったっていうことで、地域との関わり方はどうでしょう。

牛来委員

この4月に安芸高田市の廃校になった小学校を活用して、個人の方が融資を募り、クラウドファンディングでお金を集めて、学校を借りるために家賃まで市に払い、SDGs 研修センターなるものを作る。ここでは、異世代交流をすごく重視されてやっておられます。

こういうところを、高校も利用する。彼らがやるような活動の中に入り込んでいって、そこで、何か成果を作ることも一つあるのかなと思っています。彼らがやろうとしていることは、いろんな交流、体験、活動をイメージしており、東京から、アドバイザーを招いて、SDGs ビジネススクールみたいなものを、企業向けや、地域の子どもたち向けにやろうとしています。

そういうところを利用して、高校から第一線のアドバイザーたちに指導とか、アドバイスをもらってビジネスが生まれたりすると、すごい成果だし、アピールできると思います。

SDGs ビジネスっていうと、ハードル高いように聞こえますけど、身の回りの私達の地域の中での課題解決、例えば竹がいっぱいあって困っていて、それをチップにして何かにするとか、捨てられている食品をどうのこうのとか。そういった高校生でも、取りつきやすいテーマで、いろいろやっつけていけるのではと思っています。

私はここの委員になっていて、1支援者の1人。やっておられる方は何者かという、中電にもともとおられて中国産業創造センターの常務理事だった方。

もう一つ伝えたいのは、例えば地域の大前醤油の大前社長もここにも絡んでいらっしゃったりして、彼は商工会の会員で、かなり活動している人ですし、いろんなところとつながっておられますので、情報としてお伝えしたいと思いました。

上水流委員長

地域の人たちとどうやって触れ合うかとか、生徒が学びたいときに、どういうふうに地域の方が、地域のことを提供できるかが大切なのだと思います。それ自体が地域に関わっていく、入口になっていくので、リスト、こんな人がいる、こういう活動がある、ということ、何らかの形で分かるようにしておいて、高校生に見せて、高校生が関心を持ったことをサポートしていくことが必要かなと思います。

「高校生のため」、「高校生が地域のために何かしてくれ」というのは、全然思ったことがなくて、むしろ、高校生がしたいことのために地域が何を提供できるかっていう発想だと思います。

世羅高校でお話したときに、高校も地域のために何ができるというお話があり、逆の話でみると、世羅高校の陸上部の子は、自分は将来、スポーツの指導がしたいなど、いろんなことを言ってくれました。そこで僕が申し上げたのは、世羅にはホテルができますので、外国人がくる。外国の人はジョギングも好きな人が多いので、ジョギングするコースを作ってあげて、これだったらどのぐらいのカロリーの消費があり、どのようにコースを走ったらいいですよといった情報を提供してみる。自分の作ったプログラムがどのくらい外国人に受けるか試してみたらやってみたらどうですか、それを高校側がサポートしてみたらどうですかと話しました。

また、管理栄養士になりたいっていう子がいたので、そのホテルは朝ご飯がないので、朝ご飯メニューを地域の人と考えて、提供してみたらどうですか。自分が作ったら、売れるのかどうか試してみたらどうですか、売れるか、売れないかトライしてみると、新しい発見や、次への発想ができるのではないでしょう。

そんな、生徒が何をやりたいのか、それに対して地域がどんな場所を提供できるのか、というような発想で、やっていくことが僕は必要だろうなと思っています。失敗しても、うまくいなくても、そういう学びの場を提供していく。それはあくまでも、子どもが何をやりたいのかに応じて、

我々が、何が提供できるのかという発想の活動ができないか。そういう意味でのリストづくりです。

何か地域のために働きなさいというのは、ちょっと違いただろうと僕は思っているのですが、そういうような活動をしていくことも必要だろうと思います。

福岡委員

その話で思うことは、社会的な課題が何なのかを見るには、安芸高田は本当に、教材だらけだと思います。社会的な課題に直面している現場もだし、それに対して、何かしらアクションを起こしている人もおられます。

どういう課題があって、どういうところに自分たちが関われる余地があるのかを見に行くのに、こんなに近くに多様なフィールドがある町はないと私は感じていて、そのまま自分のやりたいことに挑戦できる機会として、単純に高校の教室の中だけで話すというより、地域をキャンパスのようにして活用することができるポテンシャルがあると感じます。先ほどの人材リストだけではなく、場所リストといった、何十人かの高校生や、中学生でも訪れて学びを深められる、1日を提供できる、場所リストみたいなものもあっても良いと思いました。

遠足のようにバスで行って、学んで、印象的な体験を作ることができそうだなと思いました。

上水流委員長

楽しいとは、自分のしたいこと、学びたいことを学んでいくことが楽しいので、そういうものがサポートできることが大切だと思います。

それが将来的に、安芸高田市で積ませてもらった経験が、将来的に安芸高田市に対して何かしら、思いを持っていくことになっていくのではないかと思います。

今、社会的課題と福岡委員がおっしゃいましたが、そういう社会課題に自分でチャレンジしてみたことも、いい記憶になるのかなと思います。こうした経験があって、いつかまちに戻ってきて何かやりたいなと思ってくれたらいいし、遠くからお金を寄附することでもいいし、多様な経験や学びを積んでもらうことは、非常にいいことではないかなと私は思っています。

永井委員

私個人の反省でもありますし、義務教育の反省かなというふうに関心しているのが、学校教育目標とか、研究主題に、小学校、中学校は「ふるさとを愛する」とか「ふるさとに愛着を持つ」といったような表現をします。

しかし、それは、大人サイドのエゴであったり、押し付けであったり、今の委員長の話とも通じるんですが、本当に子どもが学びたいと思っていたか、関わりたいと思っていたかを考えると、非常に疑問の部分があります。

私も「ふるさと学」と名をつけて、副読本まで作ってやりましたが、今は全く白紙に戻して、探究学習とか、探究活動で子どもたちが調べたいことを調べる。今、県内では、グループでやる地域が大半ですが、安芸高田市は当初から1人1研究ということで、ささいな取り組みからですが、今、学びを変えています。福岡委員が言われるように、安芸高田市に限った話じゃないかもしれませんが、確かに、安芸高田市は、ある意味日本の縮図の典型のようなところで、農業の問題もあれば福祉の問題もある、いろんな課題があって、学びやすい。

これまで、義務教育は少なからず安易に、大人側の押し付け、エゴのような形で、「地域は大事に」「地域を愛さない」というような形であって、でもそれで子どもたちが本当に、そういう子どもに育っていったかどうかというのは、極めて不透明な部分があります。そのあたりをしっかりと、義務教育は引き続いて整理していかないといけないと、最近、強く感じているところです。

上水流委員長（まとめ）

長期的なところで言うと、吉田高校に求められているのは地域で考えたときには、すごく幅広いと思います。

大学進学から農業の分野まで幅広く行う教育の形は、地元にあって欲しい1つの高校のスタイルだと思います。

例えば、日彰館は、高校進学から就職する子までサポートを細かくしている。その中でどういうふうに、それぞれの個々の生徒の思いを実現していくか。

大学選択で少し高度な授業が必要なのであれば、それをサポートできる仕組みはあってもいいのではないかと思います。今回のアンケートを見ても、大学進学を考えている生徒がいるので、そこはしっかりとサポートしていけたらと思いました。

一方で、向原高校の場合は今回のアンケートで「学ぶこと」がありませんでした。何かしら特色を出していかないといけないと思います。総合的な高校のパターンでいいのかどうかと、僕自身、正直少し思っているところがあり、校長先生のお考えはたくさんあると思うんですけど。さっきの長期的にという時に、向原高校が近辺にある高校の中でどういう立ち位置に立つのか。向原に行かないと学べない、向原高校だからこういうことができる、というような特色がもうちょっとあったほうがいいのかと思います。

それを今から、徐々に作り上げていく、出していく作業をやらざるをえないと、私は正直思っているところです。

先ほど、今年度の会議の中で「英語」と校長先生から言われて、それはそれで1つの考え方だと思います。牛来委員からは、1つの話題をご提供いただいたと思います。ビジネス英語じゃないですが、英語に強くなる高校を目指していくこと、私はアントレプレナーシップを押ししていますけど、それも特徴として出していくのか、もちろん大学に行きたい子をサポートしつつ、同時に何かしら高校のカラーを打ち出せたらと思います。

牛来委員も言われていました、市外から来るってことも視野に入れていかないと、もう安芸高田市内だけでは難しいと思います。向原は、広島市からも通学できるので、そのイメージも持つ必要があるかと思っています。

本多委員

僕は、向原高校の卒業生です。向原高校のOB・OGの団塊の世代の方は、結構、有名な人が多いです。メルリランチに行かれています方とか、厚生労働省に勤められている方とか、安芸高田市からいろんな世の中に出ておられます。その人たちから「英語」というテーマで話を聞くことも1つのアイデアと思いました。

また、生徒が知りたいことと、大人が伝えたいことが「押し付け」になってきている可能性があるのかなと思いました。生徒が自発的に何をやりたいのか、英語を使ってどのようなことをしたいのか、なぜ英語を選んだのか、そうしたことを特色として、強みに変えることが必要だろうと感じています。

多分、ネタはいっぱいあって、そのネタを掴んでもらう、方向性を選んでもらう。自発的にやってもらうというのが必要なのだと思います。

やらされている環境は、やる気も失いますし、どうしても投げやりになってしまうものもあるとは思いますが。

ただ、そこで何かをするっていう覚悟を決めるのは、高校生の16~18歳ぐらいの子には、非常に大きな難しい決断であると思います。

大人になれば、決断の繰り返しで、失敗、トライアンドエラーも含めてやっていくことになります。高校時代からチャレンジを繰り返していく環境をつくり出していくサポートができれば、いいのかなと思います。

上水流委員長

向原高校は、「ようこそ先輩的」なことはされていますか？

中間委員

外部からや、地元の方などを招いて、お話を聞かせていただく機会は設けています。

学校が企画を考えて生徒を動かしていくとき、生徒の視点はないので、学校側・教員サイドからへの押し付けみたいになっていっていることは否めないと思います。

生徒がやりたいと思うことがどうやったらできるか、生徒がやりたいことを見つけていくという方向にシフトしていかないとと思います。

本多委員

生徒にやってもらいたいことに対して、選択肢を準備し、生徒に選んでもらえたらどうでしょうか。ゼロから何かやりたいことを考えてやっていこうというより、その選択肢を与える上で、本人に決断させると、本人が決めたことだから最後まで責任をもってやりきるということにつながるのではと思います。この小さな責任が、結果として成功体験にも繋がるのではないのでしょうか。

上水流委員長

例えば、講演の講師を3人ぐらい人選して、話を聞いてみたいことを自分で選んでみるという事も含めてですよね。

佐田尾委員

両校の出身ではないと思いますが、安芸高田出身で高橋乗宣さんという、三菱総研のエコノミストだった方がおられます。崇徳学園の理事長をされていた方で、今はもう引退されていますが、高橋さんから郷土・郷里の話も聞いたことがあります。美土里町のお寺が実家でした。

あとはもうお亡くなりになったかもしれませんが、土師出身の青山さんは郵便貯金会館の館長で、舞台のことはすごく詳しい人でした。この方々も講師の候補かなと感じました。

上水流委員長

先輩が話に来てくれるシリーズが、結構、好きです。日彰館高校でもずっと行われていて、例年1人か2人か呼んでおられます。

講師の方も特に高校出身だと思い出や思い出があると思うし、生徒にとっても先輩ということで、親近感がわくのだと思います。

先ほど高校への応援補助金の活用という部分がありました。今までの話の流れでは、100万円を高校生に活用を考えてみるという1つの案です。この予算を使って高校生が高校を元気にする、高校を魅力化するのに活動を考えたらう。

これが100万じゃなくても50万でも良いと思うのですが、高校生自身が自分の高校をどうやったら魅力化できるのかという試みをしてみてはどうかと思います。

そうしたことを行うと高校生が自分の高校にどんな不満や、期待を持っているのかを汲み取っていく作業にもなるのかなと思います。欲しいこととか、考えて欲しい希望が、高校生から出てきて、それを実現できるっていうことができれば、面白いアイデアに繋がっていくのでしょうか。

福岡委員

例えば、入学されてきた高校生の皆さんが、安芸高田市中を5回ぐらい遠足に行けるみたい企画があっても良いかなと思いました。自分たちで行きたいところも選んで、遊ぶだけじゃなく、何か目的を持っていくところから、自分たちで計画して、安芸高田で遊び尽くす、学びつくすみたいな感じの取組は、面白いなと思って聞いていました。

「ようこそ、〇〇高校へ」っていうことと含めて「ようこそ、このまちへ」っていうことをその時に、地域の人たちとの接点が生まれて、直接伝えることができるのではないかなと思います。

あとはさっき「地域を愛しなさい」とか「ふるさとに愛着を持ちなさい」といった話がありました。私は、今、畑の授業で高校生と関わっていて、愛された経験、良くしてもらったという感覚、こういうことを教えてもらったありがたさといった、「大事にされた経験」があって初めて、その相手への恩は感じていくものだろうと感じています。例えば、卒業する時に種をあげたら、その種の成長を送ってくれる高校生がいました。

先ほど上水流委員長がおっしゃったように、高校生からのアクションを求めるといえるのか、こちらが押しつけるのではなく、どう寄り添えるか、機会をどう作れるのかなんだろうと今日の会議の中で考えさせられています。

牛来委員

生徒たちの夢を応援するところはすごく最初の会議から共感をしています。何かの特化することの押し付けになってはいけないことも十分わかりますが、ただ、掲げたテーマに集まってきた生徒たちの夢をかなえることは押し付けではないと思います。

生徒を集める面も重要で、議論から外してはいけない点だと思っており、その具体的な戦術として、短期的に何をやっていくのかです。

昨年、うちの会社に話を聞きに来た中学生の女子が3名いました。新潟市の中学校で、その中学生の女の子3人が、自分は、アップサイクルで起業したいとか、何か古着をリサイクルするようなお店を持ちたいとか、そういった夢を持って、学校から、修学旅行の代わりなのだと思うのですが、最初に先生から連絡があって、こういう子たちが行くのどと話されて、先生が引率してくるのかと思ったら、3人だけで来ました。

広島市内では、うちともう1社と平和学習を、本人たちがいろいろ計画して回ったそうです。その一旦だけでも、この中学校、きっと、いろいろやっているのだろうな、面白いなって、伝わってきました。

だから何をやるかはすごく重要だと思っていて、安芸高田市内をいろいろ見て回るとか、やってみるといいと思うし、あとは予算に限りがあるので、どう使うかだと思います。

こつこついろんな種まきをする方法もあると思うし、1点集中してインパクトをつけた方が、メディアも取り上げてくれてPRには繋がるという考え方もあるでしょう。

もし私だったらと考えたときに、以前もアイデアの一つに出しましたけれども、あなたの夢をかなえるコンテストみたいな感じで、大賞にはドンと100万円あげるよとか、自分に役立つツアーを自分が計画して、全国に行ってくるよとか、そんなことを叶えてあげるよとかでもいいし、なんかそんなことができたなら面白いかなと、皆さんと話をしながら思っています。

上水流委員長

学生の思いに沿っていくことも大事だと思いつつ、向原高校に話を戻して、高校の色を出すってことが必要だと思っています。

何でも良いので、高校が考える、他の高校との差異化、向原を選ぶ理由になる、学びたいことがあることを、向原高校の中で設けていただかなくてはならないと思います。

佐田尾委員

福岡さんのお話と関係すると思いますが、安芸高田市内に遠足に行くのは良いと思います。

安芸高田市は6町から成り立っていますが、一体感がどのぐらいあるか気にしていて、6町で安芸高田市という一体感がないと、地元の高校へという機運も生まれにくいのではという気がしています。

吉田町の人が高宮のことをどれぐらい知っているとか、高宮の人は甲田のこと、向原のことをどれくらい知っているか、どんなものかなという気がしています。これは、市外から来ている先生

も、学んで欲しい気がします。

足元を改めてフィールドワークするというのは、何につけても必要かなと思います。

上水流委員長

地元の高校という意識をどのくらい持たせるかなと思いながら伺っていました。

いろんな意見を出してもらいましたが、一つは、地域の中学校と高校との結びつきについて、様々な方策がとれるかもという話です。教員の交流から、運動会・体育祭を一緒にやろうといったことも含めて、少し、結びつきを深めていくことが出てきました。これは来年度に向けてできるだけ、中学校・高校が協力する形で、実現できればいいと思います。

それから今やっているこういう活動を、PRする紙面を作っていたらいいことは、6月7月ぐらいを目途にやっていければいいといったお話も出たかと思っています。

さらに、地域との関わりも、生徒の主体性に寄り添った形で地域との関わりを作っていく、彼らが何をしたいかにどれだけこちらが提供できるか、サポートできることは何なのかだと思います。

また、高校の地域での位置付けも出てきたかと思っています。そこを、どのように伝えていくのか、例えば、向原高校が変わるのであれば、「変わる向原高校」を、どんどんアピールしていったほうが良いと思います。そこを謳っていかないと、来年度の募集につながっていかないとと思うので、どんなことができるかを考えていく必要があるだろうと思います。

補助金の100万円は、高校が考えていることもあるとは思いますが、高校生の主体的な学びとか、主体的な行動に繋がるような視点で使っていくことも、お金の使い方として検討してみても良いと思います。

牛来さんから、お金を使うにあたって、どうインパクトを持たせるかという話もありました。高校の魅力化の必要性について、今のままじゃいけないことを伝えるようなアクションをして、それが社会に認知されていくことなのだと思います。正直、喫緊だと思います。

今は、中学生の奪い合いになっているので、このままだと何も変わらないという印象を作ってしまう。何か変わっていくところを見せて、何かインパクトがあるものを作ってはというご意見が出てきたところだと思います。

今日、何をするか決める場ではないとは思いますが、来年度の会議に向けて、加速度的にいろんなことができること、やることを決めていくことが必要だと思いますので、その整理をとっているところです。

久保委員

市の応援補助金を今年度活用させていただいて広報してきました。広報活動も、1年で即効性があるものだと思っていないので、何年も続けて、前進しながら同じようなことをやり続けることが大事だと思っています。来年度も継承していければと思っています。

ちなみにその100万円の大半で、ムービーを作成させてもらっています。学校のプロモーションビデオを作って、ホームページに、ユーチューブで貼り付けています。4か月間で、1200の視聴がありました。ホームページよりも、そっちの方が、食いつきがよかったかなと思っています。

本校は、Twitterもやっていますが、ユーチューブを張りつけたり、広報物にQRコードを入れたりして、中学生がアクセスしやすいように工夫をしています。4か月で1200見ていただいたというのは、割と大きい数字じゃないかなと思っていますが、何年かこれを使い続けて、結果としてなんとか、募集につながらないかと思っています。

委員の皆様や、石丸市長にも言われましたが、生徒の夢を実現する、高校生が高校の魅力化を図るために何ができるかを自分たちで考える。確かにそこにも使えるなと思っています。将来的にはそうした活動が、生徒と一緒にできればと考えているところです。

その時にはぜひとも、市にも協力いただいて、高校生、吉田高校・向原高校も含めて、町の活性化を図りながら、生徒が主体的で肯定感を持ってくれるようなところにつながっていけば良いかなと思っています。

私が吉田高校へ2年前に来たとき、言い換えれば安芸高田に来たときに、何もないところだというのが第一印象。二番目に、市役所や周辺の方々が、「高校生と何かできんかなあ」とか、「高校になんかやってもらいたんだけど」と、高校にすごく依存されている雰囲気がありました。けど高校は高校で、授業するのが本業。そういう中で、市や市民の方は期待をされているんだなと感じました。

吉田高校では、探求科という看板を掲げていて、オンリーワンであるけど、オンリーワンだからこそ、なかなか認知度が低いです。アグリビジネス科もオンリーワンですが、これもまた認知度が低いため、何をしているかよくわからないといわれました。

課題がいっぱいあるからこそ、逆に可能性がいっぱいあると思いましたし、人々がまだ吉田高校への、可能性を捨てられていないということだと思えるようにして、いろんなご縁を作らしてもらいました。

コロナ禍で十分できてないところもありましたが、地域の方のご縁はたくさんいただきました。校内に来ていただいたり、我々が出かけたりして、地域との関係性・交流を、コロナ禍でありながら、できた方だと思っています。それがジュースであったり、三矢学のフェスタであったり、これをまだまだ浸透させていかねばならないと思っています。

方向性だけはつけたと思っているので、何とかそれを継承しながら、地道に、確実に前進を図っていきたいと思っています。

中間委員

1年間本当にお世話になりました。ありがとうございます。私は、来年度も引き続き、向原高校ですので、頑張っていきたいと思っています。

いろいろご意見いただく中で、まさに「変わる向原高校」っていうのは、本当にパンフレットに書いて発信したいと思っています。中身が伴っていないと、それは掲げられないのですが。自己満足かわかりませんが、今年度から始めた課題発見解決学習、プロジェクト、その成果を発表するんですけども、本日、発表練習をしていました。非常によく頑張っている、生徒の力になっているとすごく感じました。

ただ、一方で、校外に学びの特色として十分発信できていない、周りに十分認知されていない、他校との差別化っていうのが図られていないことも事実です。

新聞や、メディア等を通じて発信はしてきましたが、従前の媒体の使い方だけでなく、他の媒体の活用もあると思っています。様々な媒体を活用しながら発信をしていくことをさらに進めていきたいと思っています。

あと、学校の特色を出すという面で、生徒への押し付け的にもなっていることが否めない部分もあります。一方で、1点突破でこれという特色を出していくという、そういう戦略もあるとのことで、学校として何を行うか方向を出していきたいと思っています。取り組みの継続、発信も含めてやっていきたいと思っています。内容が伴う「変わる向原高校」を発信していきたいと思っています。

いろいろとご意見、ご指導いただきましてありがとうございます。引き続きよろしく願います。

上水流委員長

来年度、引き続き、またこの会議は続いていきますので、再来年度の中学生が、吉田高校・向原高校をたくさん選んでくれるように、またいろいろと頭をひねっていきたく思いますし、安芸高田市さんには、いろいろ汗をかいていただければと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

事務局

ありがとうございます。

では、今日の会議をもちまして、今年度の会議は終了となります。

また来年度も、令和6年度の取り組みにつなげていくため始めていきますが、短期的な取り組みでは、早めに動かないといけないところがあります。年度が明けて、早いうちに1回目をやらせていただき、新しい動きを作っていきたいと思っています。

また、来年度も会議の回数としては5回計画させていただいています。皆様とご相談しながら進めていきたいと思えます。

それでは長時間にわたりまして、議論いただきましてありがとうございました。本日の会議は終了します。